G20ユースサミット 2019

事業報告書

J.Y.P.S.
Japan Youth Platform for Sustainability

当イベントは地球環境基金の助成により運営されました。

目次

事業計画概要[要旨](Executive Summary) 3

背景 3

G20サミットとは？ 3

Y20との違い 4

導入 4

開催基本情報 5

神戸市外国語大学の基本情報 6

プログラム 6

一日目 6

開会式 7

ブース出展 8

当日の様子 9

ワークショップの内容 10

しゃらく/神戸ソーシャルキャンパス 10

SDGs for School 11

Team Business for Sustainability (TB4S) 11

日本学生平和学プラットフォーム(JSAPCS) 11

京都学園高等学校　図書サークル 12

立命館宇治高等学校 12

Wake Up Japan 13

一般社団法人チカン抑止活動センター 14

WAKAZO 14

ワーカーズコープ 14

二日目 14

Opening Session -「ユース＆SDGs - Think Locally Act Globally」 16

"Best Partnership with Youth"プレナリーセッション 16

分科会 16

分科会1-1　気候変動と気候正義ー1.5度に抑えるためにー 17

分科会1-2　地方創生とまちづくり 18

分科会1-3　学生による主体的なSDGsの取り組み推進 20

分科会1-4　セクシャル・オリエンテーションとジェンダー・アイデンティティ 21

分科会1-5　女性の活躍から性不平等の撤廃へ 22

分科会1-6　循環型社会～資源・環境・経済～ 23

分科会1-7　Leave No One Behind-Building Inclusive Society 24

分科会2-1　SDGsに向けてどう人々の行動を変える？ 25

分科会2-2　防災と若者- 持続可能で強靭なまちと社会 26

分科会2-3　「誰一人取り残さない」社会に向けたアクション 27

分科会2-4　若者の政治・意思決定参加 28
分科会2-5　自治体と若者の協働 29
分科会2-6　仕事の未来、未来の仕事 30
閉会式（各団体の報告、ユースサミット宣言文、閉会式、総会） 31

G20YSユース宣言 31

大阪市民サミット 32

成果 32

運営 34
主催：持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム（Japan Youth Platform for Sustainability） 34
G20実行委員会 35
神戸市外国語大学G20実行委員 36

広報活動報告 37
広報戦略概要 37
団体紹介フライヤー 37
SNSやホームページを通じた発信 37
ブログの運用 38
Twitterの運用 39
Facebookの運用 41
Instagramの運用 43
広報戦略 課題 45

助成 46
地球環境基金 46

後援 47
日本国外務省 / Ministry of Foreign Affairs, Japan 47
神戸市外国語大学 47
G20大阪市民サミット実行委員会 47
KANSAI-SDGs 市民アジェンダ /KANSAI-SDGs Civil Agenda 47
(特活)関西NGO協議会 / Kansai NGO Council 47
日本労働者協同組合（ワーカーズコプ）連合会 / Japan Workers' Co-operative Union 47
公益財団法人 地球環境戦略研究機関 /Institute for Global Environmental Strategies 47
地球環境パートナーシッププラザ（GEOC）/ Global Environmental Outreach Centre 47

事業計画概要[要旨]（Executive Summary）

Japan youth Platform for Sustainability (JYPS)は、6月22日から23日にG20ユースサミットの主催を行いました。JYPSはG20ユースサミットの開催において、若者の意見を適切に集約し、国内外における若者の意見の場を提供するべく活動しています。今回のG20ユースサミットと分科会の開催に際して、参加した200名以上の若者、NPO、 NGO、企業、マスメディアとのパートナーシップを促進しながらユースサミット宣言文の作成をしました。

背景

G20サミットとは？

G20サミットとは、「Group of 20」のメンバーである20カ国・地域（フランス・アメリカ・イギリス・ドイツ・日本・イタリア・カナダ・欧州連合〔EU〕・アルゼンチン・オーストラリア・ブラジル・中国・インド・インドネシア・メキシコ・韓国・ロシア・サウジアラビア・南アフリカ・トルコ）、そして招待国であるオランダ・シンガポール・スペイン・ベトナム、またASEAN議長国（タイ）、AU議長国（エジプト）、チリ（APEC議長国）、セネガル（NEPAD議長国）、国連（UN）、国際通貨基金（IMF）、世界銀行、世界貿易機関（WTO）、国際労働機関（ILO）、金融安定理事会（FSB）、経済協力開発機構（OECD）、アジア開発銀行（ADB）、世界保健機関（WHO）などの国際機関で構成された、世界の経済・政治および環境問題などの地球規模課題について討議し、様々な決定を行う会合です。リーマン・ショックに続く世界金融危機を克服するために、2008年に第1回目のG20サミットが米国ワシントンD.Cで開催されました。2019年では大阪で開催され、今回日本は初めて議長国を務めました。
世界のGDPの8割を占めるG20はグローバルな経済的発展に取り組んできましたが、近年ではマクロ経済や貿易に限らず、気候変動、健康、移民・難民問題、テロ対策などの世界経済に影響を及ぼす幅広い分野に焦点を当てています。
そんな中で2019年の主要テーマは世界経済、貿易・投資、イノベーション、環境・エネルギー、雇用、女性のエンパワーメント、開発、保健です。世界経済の面ではグローバルインバランス、高齢化、経済のデジタル化、低所得国の債務に対する取り組み、貿易・投資では鉄鋼の生産能力問題、世界貿易機関の改革について、イノベーションについてはサイバー空間と現実空間が一体化された人間中心となるSociety 5.0 への貢献やArtificial Intelligence (人工知能)、Internet of Things (モノのインターネット）ロボット、ビッグデータなどの新技術の取り入れ、環境・エネルギー問題では、ビジネス主導の革新による気候変動対策、持続可能なエネルギーの達成、海洋プラスチックゴミ問題の解決策についての課題が挙げられました。また、雇用に関しては人口動態の変化や新しい形態の仕事への対応、労働市場でのジェンダー平等化の促進、女性のエンパワメントエンパワメントにおいては女性の労働参加、女性のSTEM（科学、技術、工学及び数学）教育へのサポート、女性ビジネスリーダー及び起業家とのエンゲージメントの強化、開発においては持続可能な開発のための2030アジェンダにより一層のコミットメントを示し、保健においては全ての人とコミュニティが適切で経

済的な負担の少ないな医療サービスを提供するユニバーサルヘルスカバレッジ(UHC)の達成の他、高齢化社会や薬剤耐性問題への対応について議論されました。

G20では現議長国、前議長国並びに次期議長国による協力体制が組まれるトロイカ体制を使用し2019年の議長国である日本は、アルゼンチン（2018年議長国）、サウジアラビア（2020年議長国）と緊密に連携します。
G20サミットは、国際政治・経済をはじめ、途上国の開発や環境、地球規模の課題に向けた国際的な取り組みに大きな影響を与えてきています。そのため、世界の市民社会、NGO・NPOはサミットに注目し、様々な働きかけを行ってきました。関西の市民社会の声を集め、発信するG20大阪サミットも例外ではありません。2019年は、自由貿易の強化やプラスチックによる海洋汚染、デジタル経済のルール作りなど国際的な注目が高い問題が多く、G20大阪サミットも、国内外の市民社会からの大きな注目を浴びています。

Y20との違い

G20には、ユース20を含めて、右の８つの「エンゲージメントグループ」と呼ばれる、云わばステークホルダーがG20の会議や交渉に参加するための仕組みが存在します。Labour 20 (労働者)、Business 20 （ビジネス・企業）、Civil 20 (市民社会)、Women 20 (女性)、Science 20 （科学者コミュニティ）、Think-Tank 20（シンクタンク）。G20では、主催国がステークホルダーに関しては大きな権限を持ちますが、各グループにおける自治や開かれ度合いは、グループにより大きく異なります。

Y20の前に、JYPSとしても取り組んでいるC20を考えてみたいと思います。C20では、日本の市民社会連合体であるJANIC, NPOセンター、SDGsジャパンなどと地域の市民社会連合体である関西NGO協議会や都のアジェンダ２１など、様々なネットワークが集い、納得できる共同代表を決めます。参画は広く開かれており、C20本会議も、関西の市民社会主導の「G20大阪市民サミット」も含め、様々な人が当日参加することができ、当日までの準備プロセスにも関わることができます。
一方で「Y20では、「Y7 / Y20 Youth Japan」が事務局として開催及び日本代表団の選考を行います。日本人として、合計２名が代表団として参加をします。しかし、現状のY20の枠組みでは、幅広い日本の若者を巻き込むことができません。英語のみがメインとして話される場においては、英語を話すことをしない多くの日本の若者の参画が難しい状況にあります。また、各国から来ている若者代表の性質、民主的かつオープンな選抜のされ方に懸念があります。

このような問題意識から、JYPSは日本のY7・Y20 Japan Youthとの連携を模索を検討しながらも、可能な限り日本の若者としてのプレゼンスを最大化すべく努力する方針です。したがって、G20ユースサミット開催は、JYPSが持つ市民社会団体として、G20においてより社会民主性を確保するためのアドボカシーの一環であります。

導入

G20首脳会合およびG20市民サミットに先立って行われる「G20ユースサミット（G20YS）」は、6月22日（土）、23日（日）に開催される、ユースによるユースサミットです。JYPSはG20ユースサミットを開催することで、様々な背景や経験をもつ若者と共同しなが

ら、持続可能な開発を目指す若者が集い声を上げるスペースを作りました。テーマは「地方創生とパートナーシップ」、Think Locally, Act Globallyを合言葉に、地方の現場にて活躍する若者の自らの現場経験と知識を国際アジェンダに反映することで、地域の声を世界に訴えることを目指しました。

二日間に渡るサミットでは、様々な若者団体からの出展や展示、ハイレベル会合、そして「誰一人取り残さない社会」づくりに携わる若者団体による13個の分科会が開催されました。本ユースサミットの目的は、以下の４つになります。

1. G20サミットにおける若者にとって大事なこととそのプライオリティを明確にする。
2. 若者が国際問題に対し政策形成、実施、監視、フォローアップに取り組める力を示す。
3. 若者のアドボカシーにむけてのキャパシティービルディングを通じて、日本の若者の政策提言能力を一般的に高める。
4. 若者が集い、様々な面で活躍するNGOや団体と繋がることを通して、若者と他の団体とのパートナーシップを促進する。

開催基本情報

日程	2019年6月22~23日
場所	神戸市外国語大学
主催	持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム（JYPS）
共催	神戸市外国語大学
協力	地球環境パートナーシッププラザ（GEOC)
助成	地球環境基金
後援	外務省、G20市民社会ネットワーク、 G20大阪市民サミット実行委員会、日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会、 （特活）関西NGO協議会 、KANSAI -SDGs 市民アジェンダ運営委員会
参加者数	200人（内、海外の方20名程度）
参加団体	71団体
SNS	Facebook イベントページ：http://bit.ly/2W50Lgf
Webページ	http://bit.ly/G20YS
お問い合わせ先	g20youthsummit2019@gmail.com

神戸市外国語大学の基本情報

神戸市外国語大学は、1946年に設立され、2018年に設立72年を迎えた歴史をもつ大学です。本校の教育理念、「行動する国際人」の養成のもと、外国語運用能力だけでなく、広く国際的な視野や柔軟な判断力を持ち、ビジネス、外交、教育、研究、など様々な分野で活躍できる人材の育成を行なっている。本校は学部として外国語学部があり、英米学科、ロシア学科、中国学科、イスパニア学科、国際関係学科、第2部英米学科の6学科から構成されています。言語運用能力を高めるために、ICC (International Communication Course)と呼ばれる特別なコースも設置しており、学生の能力向上をサポートしています。また、本校は模擬国連への取り組みに力を入れています。世界大会への学生の輩出とその高い実績、積極的な取り組みから、2016年秋季には本学が模擬国連世界大会(NMUN) のホスト校となり、日本で初めて世界大会を開催しました。2020年にも模擬国連世界大会が神戸市外国語大学で開催されることが決定しています。

プログラム

一日目

一日目の開会式では、神戸市市長、IGES理事長をご招待した開会式、午後には若者主導の団体のブース出展とワークショップを開催しました。ブース出展とワークショップは、１時間単位でサイクルを回すことで、参加者と団体、また団体同士の交流機会を多く作り出すことができました。

開始時刻	終了時刻	セッション名	場所	テーマ
10:00	11:00	Opening Session + 鼎談・座談会	大ホール	MC
				開会挨拶、お礼、パートナー紹介
				開催神戸市市長挨拶
				パートナー挨拶
				キーノートスピーチ
				鼎談「ユース、SDGs、として日本のこれから。」
				二日間の流れ、ロジ案内、その他、開会宣言
11:00	11:15	休憩・移動		
11:15	12:15	First Cycle of ポスターセッション＆ワークショップ	第二学舎	ポスターセッション
				ワークショップ
				ポスター展示
12:15	13:00	ランチ		

13:00	14:00	Second Cycle of ポスターセッション＆ワークショップ	第二学舎	ポスターセッション
				ワークショップ
				ポスター展示
14:00	14:30	休憩・移動		
14:30	15:30	Third Cycle of ワークショップ	第二学舎	ワークショップ
				ポスター展示
15:30	16:30	Fourth Cycle of ポスターセッション	第二学舎	ポスターセッション
				ポスター展示

開会式

鼎談「次世代とSDGs」

（左よりJYPS：新武志、IGES理事長：武内和彦、総務省：田中佑典、IFMSA-Japan：田浦拓弥、Voice-Up Japan：山本和奈）

＜モデレーター＞
新武志　Japan Youth Platform For Sustainability (JYPS) New York Branch
＜パネリスト＞
武内　和彦（たけうち　かずひこ）氏　IGES理事長、日本学術会議副会長、
中央環境審議会会長、東京大学特任教授、S20副議長

山本　和奈(やまもと　かずな) 氏　Voice-Up Japan 創始者、Educate For代表、
Just Smile、創立者、KMLAB CEO(立ち上げ中）
田浦　拓弥（たうら　たくや）氏　IFMSA-Japan 2019年度代表
田中　佑典（たなか　ゆうすけ）氏　総務省、Muratsumugi代表、
一般社団法人Public Meets Innovation理事

鼎談では、「次世代とSDGs」というテーマについて様々なグループで活躍されている方々にそれぞれの視点からコメントをいただきました。まず、Voice-Up Japan代表の山本氏は国際会議に参加した際に、日本の若者の間での政治的関心やジェンダー不平等などといったテーマへ関心の薄さを問題意識として挙げ、当事者意識が必要だと強調しました。また、自分は関係ないと思っているあなたこそ、こうした問題に責任があり、社会や世界を変える力があると発言しました。次に、IGES理事長である武内氏は若者の感受性の高さとその可能性について言及しました。一方で、日本の国際社会における研究調査力の低下や海外留学に行く学生の数の低下の2つの現状を鑑みて、若者の博士課程の進学率の低下（必ずしも研究職につけるわけではないといったリスク）や若者が他文化に触れる機会の減少に懸念を示しました。IFMSA-Japanの田浦氏は、医療から世界のあらゆる地域の若者とが繋がり、協働しているIFMSAの活動内容についてお話いただきました。最後に、田中氏は行政と若者の連携とその可能性について、前向きなお話をしていただきました。行政は新しい世代と関わりを持つことがこれまでは少なかったことを踏まえて、これからテクノロジーの力でどのようにこの新しい世代と連携を取って地方創生を推進して行くのか、そしてその重要性について説明していただきました。

ブース出展

出展団体一覧

PEPUP	高松秀徒
Climate Youth Japan	今井絵里菜
Wake Up Japan	鈴木 洋一
神戸ソーシャルキャンパス	坪田卓巳
立命館宇治高校・LGBT	図司華音
WAKAZO	川竹絢子
立命館宇治高校・貿易ゲーム	筒井響
痴漢抑止活動センター	松永弥生
ワーカーズコープ	酒見友樹
SDGs for School	藤井 美和
立命館宇治高校・海洋プラスチック問題	奥田悠友
立命館宇治高校・教育格差	岩田秋桜
Future Code BYCS	打田美穂
まなびと	中山迅一

神戸市	魚山　純子
Study for Two 神戸外国語大学支部	田口麻衣子
Study for Two 奈良女子大学支部	五屋 郁美
A SEED JAPAN	石原　遼平
AIESEC神戸大	久末敏博
TRY	松田成美
日本平和学プラットフォーム	本間雅恵
立命館宇治高校・衛生的な水利用	高尾宙歩
Team Business for Sustainability (TB4S)	小野澤 孝良
ユースラムサールジャパン	佐藤琢磨
生物多様性わかものネットワーク	浅見友里
ガーナの子どもとshare step	成田丈士
国際開発ジャーナル	田中 信行
日本国際学生協会	宮本大輝
IFMSA-Japan	田浦 拓弥
NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット	鬼沢良子（キザワリョウコ）
GENESIS	鈴木七海
IRESA	黒木海仁
ESD Youth Japan	青山真弓
京都学園高等学校図書サークル	伊吹　侑希子

（敬称略）

当日の様子

Student Commonsにて、たくさんの若者主導の団体がワークショップならびにポスターセッションを行いました。

ワークショップの内容

しゃらく/神戸ソーシャルキャンパス

カードゲーム「SDGs de 地方創生」(※)体験をきっかけに、SDGsを自分事とし、各々が暮らす地域やキャリアの中でどう生かしていくのかを考える対話型ワークショップを行いました。15分間の自己紹介、SDGs や地方創生といった背景をお話しした後に、ルール説明を行いゲームを開始しました（カードゲーム「SDGs de 地方創生」の詳細はこちら）。

SDGs for School

普段と違う職業の観点から仮想の国をより持続可能な国にしてゆく方法を考えてもらうワークを開催しました。具体的な内容として、SDGs for School/ワークショップの説明（職業の割当、仮想の国が直面している社会問題の提示）をした後、アイスブレイクを通じ理想の国造り、問題解決方法を話し合い、違う国の同じ職業の人と話し合ってもらいました。それぞれの知見を共有した後、それぞれが元の国に政策を作ってもらい、SDGsのどのゴールが当てはまるか考えてもらいました。最後に、参加者全体にプレゼン形式でどのような政策を考えたか共有してもらいました。仮想の国はワークショップの回を重ねるたびに発展してゆき、前回の成果を反映させた設定からワークショップを開始しました。

Team Business for Sustainability（TB4S）

ビジネスがSDGsの達せに貢献できることの理解を深めるために、SDGsコンパスにそって「会宝産業株式会社のビジネスケーススタディ」についてグループで議論しました。具体的に、導入とアイスブレイクのあと、ワークショップの説明とケースを紹介し、グループで議論しました。また、その成果物を最後に発表し、まとめとしてソーシャルビジネスについてお話ししました（SDGsコンパスの詳細はこちら）。

日本学生平和学プラットフォーム（JSAPCS）

国際問題について主体的に理解すること、そして平和学に関心を持ってもらうことを目的に、「平和構築って何だろう？」というテーマでワークショップを開催しました。はじめに、平和学について、けんかから戦争まで平和学の父であるヨハン・ガルトゥングのセオリーをもとに紹介しました。次に、レモンゲームを15分間行い、PINセオリーについての理解を深めた後に、トランセンドメソッドや国際問題のロールプレイを行いました。国際問題（紛争）は、日常生活におこるちょっとした喧嘩と同じです。常に自分も当事者としての視

点からBoco Haramといった国際問題に関心を持ち続けてもらうことと、相手に寄り添い理解し続ける姿勢の大切さを伝えることを目指しました。

京都学園高等学校　図書サークル

2018年から1年間かけて、SDGsの理念にのっとり「誰ひとり取り残さない」防災のあり方について考え、「災害ミッションゲーム　スクラム」を考案し、実施しました。日本で頻発する災害について、どのような課題があり、どうすれば災害を最小限におさえられることができるのか、シミュレーションゲームを通じて、参加者と課題の解決方法を話し合うゲームとなっております。ワークショップでは、実際に「災害ミッションゲーム　スクラム」を参加者に体験していただき、今後、日本や世界で起こりうる災害に対して、どのような事前対策ができるのか、災害時にはどのような行動がとれるのか一緒に考える場を提供しました。

立命館宇治高等学校

貿易

世界の貿易の本質と現状の理解を促進し、打開策を考えることを目的に貿易ゲームを開催しました。具体的に、貿易ゲームのやり方を説明した後、ゲームの準備に取り掛かり、ゲームを行いました。また、ゲーム終了後各班で話し合い、それぞれの経験をもとに考えたことを発表し、参加者全員で振り返りを行いました。

教育格差と自分らしさとは

本ワークショップでは、教育の格差についてラオスの現状と日本の現状を比較しながら説明し、情操教育についての議論を行いました。また、魚の住む環境、場所、感情等を含む魚の絵をはじめと最後に書いてもらうことで、自分らしさを表現してもらいました。最後に、日本国内での格差と生まれた場所によって発生する格差について紹介しました。

プラスチックストローが与える海洋問題についてのワークショップ

本ワークショップでは、はじめに海洋問題の現状を学ぶために、映像やパワーポイントスライドを通じて、使用されなくなったプラスチックストローの行方についての理解を深めました。現状把握をしていただいたのちに、参加者にどのような対策手段があるのかグループで議論してもらい、実際にスターバックスやマクドナルドが行なっている施策の例を紹介しました。最後に、参加者それぞれに自分たちにできることを思考してもらい、全体で共有しました。

ジェンダー平等について考える
本ワークショップでは、世界のジェンダー差別の現状について学び、ゲームを通じて差別的にならないための方法を参加者に考えてもらいました。具体的に、アイスブレークで色分けした後、らしさ分けゲームを行いました。次に、LGBTの現状と世界の許容度合いについて議論し、グループ毎に三ヶ条を作成しました。

Wake Up Japan

パートナーシップ
本ワークショップは、「ユースと社会変革ーパートナーシップで社会を変える！」をテーマに開催いたしました。具体的に、ハーバード大学ケネディスクールにおける「コミュニティー・オーガナイジング」より社会変革のための3つのHと社会を変える上でのパートナーシップの重要性についてその概念と海外の事例をもとに紹介しました。ディスカッションでは、若者がNGOなどの団体とパートナーシップを進める上でのボトルネックと促進要因、ユーストしての比較優位について、グループで議論を行いました。最後に、グリーン・ピース・インターナショナル・ジャパンの事例を紹介しました。

人権
本ワークショップは、「Human Rights –人権がつなぐSDGs。誰一人取り残さないの前提としての「人権」をテーマに開催しました。まず、社会変革のための3つのH
（ハーバード大学ケネディスクールにおける「コミュニティ・オーガナイジング」について説明し、自分たちの持つ人権について体験型のアクティビティを通じて、人権の自覚を促すことで人権に関する認識を深めました。ディスカッションとして、人権と法律のどちらが上なのかというテーマについて議論をし、「市民的不服従」と「社会変革」について共有することでまとめとしました。

変革
本ワークショップは、システム思考ワークショップから考える「私たちの前提」をテーマに開催しました。上記の二つ同様に、社会変革のための3つのH
（ハーバード大学ケネディスクールにおける「コミュニティ・オーガナイジング」について説明した後、ゲームチェンジはいつ起こったのか、或いは、なぜ起こらないのかについて、また、日本社会において、私たちの「変革」を妨げるものは何かについて議論しました。

一般社団法人チカン抑止活動センター

本ワークショップは電車内痴漢抑止について、皆で考えるをテーマに開催しました。電車内痴漢の実態について、警視庁発表データと痴漢加害者像を引き合いに説明しました。また、警視庁開発デジポリスやSOSアプリなどの痴漢抑止のためのアプリを紹介したのち、被害を未然に防ぐために、乗車時に気をつけるポイントや痴漢抑止バッジについて触れました。アクティビティとしては、自信があるように見せる姿勢や表情について、そしてNO!の意思を示す方法や、助ける時の注意事項について練習し、話し合いを経て、全体共有をまとめとしました。

WAKAZO

「大阪・関西万博を通して、アフリカの若者と参加協力型のSDGsへの取り組みを推進する」をテーマに本ワークショップは開催されました。WAKAZOメンバーとアフリカ出身の留学生とのパネルディスカッションを中心として行われました。国連が発表した世界人口推計では、2050年にアフリカの人口は20億人を超え、2100年の世界の人口は、アジアが47億人、アフリカが40億人になるとされ、アジアとアフリカだけで世界の人口の90%を占める、という統計になっています。21世紀は、アジア・アフリカの時代になっていくと予想される一方で、アフリカには環境・医療分野をはじめ、課題が多く存在します。こうした背景を踏まえ、2025年の大阪・関西万博では、「アジアとアフリカの若者」が連携を強めながら、「参加協力型」という新たな国際協力のあり方を提示しながら、「SDGsの課題解決」に取り組んでいく必要があります。WAKAZOは、今年度、アフリカというフィールドでの課題解決を推進する、というコンセプトのもと、「mini WAKAZOPavilion」展示を実施する予定であり、それを踏まえ、どのような課題に、どのようなあり方で取り組んでいくべきか、WAKAZOメンバーとアフリカ出身の留学生が、パネルディスカッション形式で議論することでこれらの問いに解を見出すことを目的としました。

ワーカーズコープ

本ユースサミットの後援をいただいている日本労働者協同組合（ワーカーズコープ）連合会には、ワーカーズコープが作成した映画「Workers 被災地に起つ」の上映会を行なっていただきました。この映画は、2011年に起きた東日本大震災を受けて、被災地支援の一環として行われてきた「子供の居場所づくり」や「障害者も巻き込んだ復興事業」、「地元資源である木材を生かした林業事業」など、ワーカーズコープによる様々な事業を追ったドキュメンタリー映画です。1時間半の長い映画鑑賞にも様々な人が参加してくださり、本当の意味で「地元の人を巻き込んだ復興とは何か」について考える機会となりました。

二日目

二日目は、午前にOpening Session-会談「ユース&SDGs - Think Locally Act Globally」、”Best Partnership with Youth”というプレナリーセッションと、午後には多様な分野で活躍するユースを中心にした分科会を開催しました。分科会のテーマとしては、大学とSDGs、気候変動、地方創生とまちづくり、循環型社会、女性の活躍、誰一人取り残さない社会に向けたアクション等の若者の関心に近く、かつ、現在の社会課題に結びついているものを選択しました。分科会の形式は、基本的にパネルディスカッション形式で行い、登壇者からの一方的なスピーチだけでなく、参加者からの質問を拾い上げることで、双方向のコミュニケーションを円滑化しました。

開始時刻	終了時刻	セッション名	場所	テーマ
10:00	12:00	Opening Session -「ユース＆SDGs - Think Locally Act Globally」	大ホール	
12:00	13:00	ランチ		
13:00	14:20	分科会 First Cycle	504	分科会1-1　気候変動と気候正義ー1.5度に抑えるためにー
			503	分科会1-2　地方創生とまちづくり
			506	分科会1-3　学生による主体的なSDGsの取り組み推進
			Student Commons	分科会1-4　セクシャル・オリエンテーションとジェンダー・アイデンティティ
			502	分科会1-5　女性の活躍から性不平等の撤廃へ
			505	分科会1-6　循環型社会～資源・環境・経済～
			501	分科会1-7　Leave No One Behind-Building Inclusive Society
14:20	14:40	休憩・移動		
14:40	16:00	分科会 Second Cycle	503	分科会2-1　SDGsに向けてどう人々の行動を変える？
			505	分科会2-2　防災と若者- 持続可能で強靭なまちと社会
			501	分科会2-3　「誰一人取り残さない」社会に向けたアクション

			502	分科会2-4　若者の政治・意思決定参加
			506	分科会2-5　自治体と若者の協働
			Student Commons	分科会2-6　仕事の未来、未来の仕事
16:00	16:10	移動		
16:10	16:40	クロージングセッション	503	ウェルカム
				キーハイライト
				Inspirational Presentation
				Closing of the day Remark
				Adoption of Statement & Closing

Opening Session -「ユース＆SDGs - Think Locally Act Globally」

2日目のオープニングセッションでは、SDGs、若者、社会問題、などに関連するスピーカーを呼び、各団体・機関の取り組みや若者との関わり方についての登壇を行いました。登壇者は、グローバルコンパクト事務局長の大場氏、UNV本部渉外広報部から境氏、SDGs市民社会ネットワーク業務執行理事である長島氏、はんしんワーカーズコープ代表である馬場氏、神戸市企画調整局政策企画部産学連携課長である藤岡氏、そしてJYPS事務局NY支部統括加戸の6名でした。各団体や機関では、それぞれ地域レベルから国内、そして国際レベルまでの活動や取り組みについて言及していました。

”Best Partnership with Youth”プレナリーセッション

プレナリーセッション “Best Partnership with Youth”では、６名の登壇者が考えるこれからのユースのかたちについて、モデレーターであるJYPS事務局員大久保を中心にパネルディスカッションを行いました。それぞれのユースと関わりのある団体からみるこれからのユースについて、ユースを取り巻く環境、そしてユースとの関わり方など、登壇者の多様な経験や知識を交えて意見の交換がありました。オープニングセッションの題にもあった”Think locally”＝「地域的に考える」、つまりはユースが自分の身近にあるものから焦点を当ててみることについて多くの意見が挙がりました。自分の地元の政治や政策に積極的に関心を持つこと、そして若者が政治参画に取り組む第一歩としてまずは選挙に行くことで自分たちの意見を見える化し表明することの重要性が話されました。

SDGsを社会に浸透させ、広告化をせず実際に達成への道筋を立て、どのように行動に移すことができるのか。取り巻く環境の中で若者一人一人が社会問題を自分ごとと捉え社会に向けて行動に移す流れを作るためには他ステークホルダーとのパートナーシップを若者からだけでなく、政府、市民社会からも構築を促すことを重要視し、まずは「自分の地域か

ら始めること」をセッションの終わりに再確認することができました。

分科会

G20ユースサミットでは、ジェンダー、難民、気候変動、防災、資源循環、地方創生をはじめとした13の分科会に対して、およそ50名の登壇者が参加しました。各分科会登壇者は、各分科会テーマを掘り下げ、普段の活動と結びつけるだけでなく、分科会の参加者とも相互に交流し、より深い議論を提供しました。その上で、参加してくれた若者（約140人）や、分科会の登壇者からのコメント、提案を通じて民主的かつ包括的な意見の集約し、G20YSユース宣言を作成しました。

分科会1-1　気候変動と気候正義ー1.5度に抑えるためにー

登壇者：上智大学大学院地球環境学研究科、Climate Youth Japan、A SEED Japan、IRESA

＜背景＞

「プラネタリーバウンダリー」ここを超えてしまうと人間が地球に住めなくなってしまう限界点が考えられているように、気候変動は現在私たちが自分ごととして考えなければならない問題です。パリ協定では、産業革命前と比べ地球の平均気温上昇を1.5度に抑えることを目標としましたが、今まで以上の危機感で気候変動と気候正義に取り組まなければ、その目標を達成することはできず、現惑星の環境に取り返しの付かない影響を及します。だからこそ、将来長く社会を引き継ぐ若者の観点は重要であり、若者の行動が求められています。

＜課題＞

気候変動に取り組む上で、問題意識を持っていたとしても実際に行動に結びつけることが難しいです。一般的に「危機である」とは言われているものの、現在の日本においては危機感を持つような身近な問題であるという意識が持てていないのが現状です。また、危機意識から取り組みを始めたとしても「危機感」を持ち続けることは辛いことでもあると同時に、それだけでは続けることが厳しいです。そのため、取り組むことがカッコイイ、当たり前、楽しいというような世の中に変えていかなければなりません。さらに、気候変動に対するデモが行われていますが、周りからの評価や敷居の高さから参加が難しいという人も少なくありません。平和的なマーチを行っているが、その雰囲気を保ちながらメッセージを発信することも課題となっています。

＜今後のアクション＞

環境問題はこのままでは解決されないため、具体的な目標、具体的な取り組みを決め取り組む必要があります。そのため、各国政府は、地球上の全生態系とその上に成り立つ経済に甚大な被害を与え得る気候変動を含む地球環境問題に対して、気候正義の観点から、気候変動の影響を大きく受ける現在の若年層及び将来世代に対する責任を強く自覚しなければならないと考えます。また、IPCC1.5度報告書を受け止めた上で、2050年までに実質的に温室効果ガスの排出量をゼロにするための政策及び他の開発途上国に対する資金支援と人材育成支援を、その実施に係る具体的なロードマップの作成を早期に行いつつ実行することを求めます。

誰がゼロにするのか？G20か、全世界なのか？2050年目標のみならず、今のアクションを書くべきではないか？今のアクションをとるべきこと、ロードマップの作成を●●年までになどの質問に答える形式で先進国による途上国に対する支援（資金、人材）などを具体的に示し、自分たちの利害寛解を超えて地球の便益を重視した取り組みを実施し、若者の声を反映させていきたいと考えています。

<u>分科会1-2　地方創生とまちづくり</u>

登壇者：コスタディ神戸, NPO法人しゃらく, 株式会社パソナグループ

〈背景〉
見地方創生とSDGsの関係性に疑問を持つ方もいるかもしれませんが、持続可能な社会を実現させるためには、地域の活性化が必要不可欠です。現在、先進国である日本で、少子高齢化や過疎化などで地域の元気がなくなってきている現状があります。その結果、農業で農作物が取れなくなったり、漁業で魚が取れなくなり、結果的に日本全体で持続可能な社会が実現できないという問題提起に繋がります。今後、日本全体での持続可能な社会の実現に向けて、若者としてどう地域に関われば、SDGsが達成できるのかというところを考えることが重要視されます。

〈現状抱える問題〉
現在抱える問題としては、地方において過疎化による労働人口の減少が挙げられ、その１つの要因として若者雇用の大都市への集中が考えられます。日本では、少子高齢社会が進んでおりこれからの労働人口はさらに減少していくとの見解が示されていますが、減少していく中で地方の過疎化・都市への労働人口が集中するとより一層今抱えている問題が深刻化すると考えられます。また、地域ブランドの不在が地方の抱える問題であるとも考えられます。自治体の１つの収入源として観光業(サービス業)が挙げられますが、地域ブランド(名物・歴史的建造物・アニメの聖地)が世間に認知されていない場合、その地域への観光客流入数は難関であると考えます。

〈今後のアクション〉
現状抱える問題の中で、都市部への若者・労働人口の集中を挙げましたが、この課題の解決策として地方における各セクターのネットワークを形成することが必要であると考えます。各セクターとは主に、学生・企業・NPO法人が挙げられ、それぞれがコネクションを持ちお互いを認知し合うことで、各セクターが持つポテンシャルを最大限に活かされることが期待されます。類似点として、職業難民の学生と人手不足の企業とのコネクションを作ることでお互いのニーズに応えることができると考えます。もちろん、シンプルなニーズの一致だけではなく、それぞれの細かいニーズが一致してこそウィンウィンな関係を保つことができるため、複雑な部分をどのように一致させるかが今後の課題です。また、地方の観光業の面で、地域の持つ観光資源(ポテンシャル)をいかに最大化させるかがキーポイントとして考えられます。観光業の開発だけではなく、まちづくり全体として考える際に、マクロ視点だけではなくミクロ視点(そこに住んでいる人々・場所・モノ)でも見る必要があり、ミクロ視点で物事を見ないことには地方創生に繋がらないという意見もあげられました。

分科会1-3　学生による主体的なSDGsの取り組み推進

登壇者：立命館Susatinable week 実行委員会、早稲田大学学生NPO環境ロドリゲス、アイセック・ジャパン、立命館宇治高校

〈背景〉
国連で策定されて以来、徐々に認知が広がってきたSDGsでありますが、皆がそれに理解を深め、実行することこそ大切です。また、人は幼い頃の原体験や課題意識が将来のベクトルを規定するからこそ、学生の頃にいかに社会に目を向ける機会があるかは重要な役割を持ちます。本分科会では、日本の学生のSDGsの取り組みを知ることで、将来を担う若者がどうこれからの問題に取り組んでいけるのか、今学生として何ができるのかを参加者が考えていくきっかけとして始まりました。

〈現状抱える問題〉
SDGsは徐々に浸透しつつありますが、現状日本の学生が連携して大きな活動になるにはいまだ至っていません。そもそも、全ての大学には浸透しきっていないこともまた問題です。特に単科大学や地方の大学では、そもそもSDGsを知る機会に乏しく、興味を持っている人が少ないので活動が活発化しにくいという現状があります。大学生でもこのような状況なので、中学生や高校生にとっては社会問題に興味を持つのは以前ハードルが大きく、そのような教育はハードルが高いとの声もあります。日本は恵まれているからこそ、社会問題に当事者意識を持つ機会に乏しいとも言えそうです。

〈今後のアクション〉
まずは、社会に貢献してみたい、何かを守りたい、小さな問題意識をもとに小さな行動から始めていくことが大切という声が多く聞かれました。そのように活動していると、意外と大人も見てくれていて、自分たちの取り組みに共感して手伝ってくれることに気づくのでしょう。具体的には、大学の教授や職員も巻き込んでいくことで、大学全体を動かしていくことができると思われます。また、社会のことをもっと知ろうとすること、SDGsに関する取り組みや学びをシェアするプラットフォームやコミュニティを作ると、活動が活発化しやすいとの声も出ていました。SDGsは、17個の目標があります。これはつまり多様な団体が

SDGsという言葉のもとにつながり、関われるということであり、より多くの団体を巻き込んでいくことが大切です。中学生、高校生に関しても、海外研修や国際交流活動など国際的な問題を意識できる機会をもっと創出し、それを契機として多様な価値観を感じ、地球規模の課題について話し合ってみることが重要との意見が出されました。

分科会1-4　セクシャル・オリエンテーションとジェンダー・アイデンティティ

登壇者：特定非営利活動法人虹色ダイバーシティ、新設Cチーム企画

＜背景＞

SOGIの問題は、国連人権委員会でも勧告が何度も出ている通り、人権の問題であり、非常に長期に渡り、その阻害、迫害、さらにひどい処罰も行われた歴史のあるものです。一方で、最近少しずつその権利を法制化する動きも増えており、例えば、同性婚および登録パートナーシップなどの形式で、同性カップルの権利を保障する制度を持つ国・地域は世界中の約20%の国・地域に及んでいます。しかし、日本においては、一部自治体で進んだ取り組みが行われているところもあるものの、国レベルでの動きは乏しいのが現実です。

SOGIに関わる問題は、決して最近の問題ではなく、長期にわたり、様々な人が、戦ってきた問題です。本分科会では、様々な視点からプロアクティブな取り組みを行っている人や、制度上の問題を争ってきた人々を含め、具体的な制度上の問題と、若者としてどのような行動がとれるのか考えます。また多くの参加者が聞いたことしかない問題に対し、適切な導入となるようし、SOGI問題の深みと歴史を学べる機会とします。

＜現状抱える課題＞

現状抱える課題として、学校制度と教員に関することの教育面における2点からました。
学校制度に関する課題として、制服などのシステムが多いことや、教科書に記載はあるものの、カリキュラムに入ってないないことから授業で触れないことが問題として挙げられまし

た。また教員の問題としては、そもそも教員が教員課程で学んできていないことや、忙しくて新しいことを学ぶ余裕がなく知識をつけることができない、また相談する場所もないという問題があります。
その他にも、日本はカミングアウトしづらい環境であること、同性婚に関して、世論調査ではほとんどが賛成しているにもかかわらず、法整備が進んでいないことなどが挙げられました。特に印象深かったお話として、「日本に比べアメリカなど欧米諸国のほうがLBGTの人が多いわけではなく、カミングアウトしやすい環境が整っているか整っていないかが異なっている」というお話があります。

＜今後のアクション＞
今後のアクションとして、「SOGIにまつわる差別撤廃のための提言書」の作成、日本の大学においてLGBTQ+を学べる環境の整備のための、大学への積極的なはたらきかけ、カミングアウトできる環境をつくることをお話されました。

分科会1-5　女性の活躍から性不平等の撤廃へ

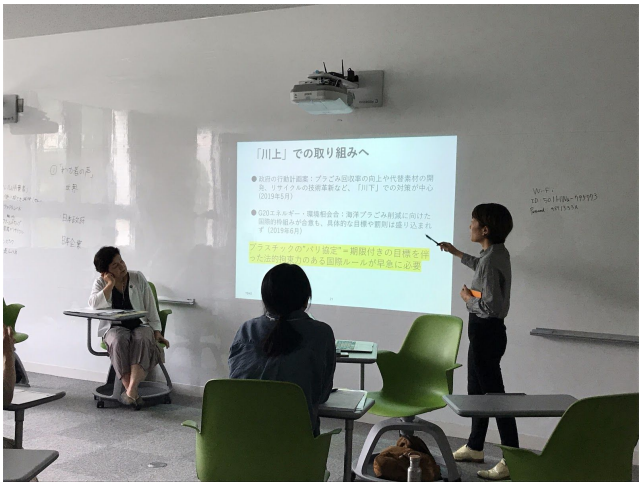
登壇者：VoiceUpJapan、ちゃぶ台返し女子アクション、GENESIS/ジェネシス、大阪男女いきいき財団（（一財）大阪市男女共同参画おまち創生協会）

＜背景＞
「性差別」や「性暴力」の日本の社会や文化の中での現状として、日本特有の「性差別」があることや、「当事者意識の欠如」や、社会に対して声を上げていくことが妨げられているという現状がある。この分科会では「性差別の当事者意識」をベースにこれらの現状・問題に対してディスカッションが行われました。
＜現状抱える課題＞
現状多くの課題を抱えている。日本特有の「性差別」の存在、性差別や性暴力に対する問題意識などであります。また、「出る杭は打たれる」という風潮の中でどのようにして「当事者意識」につながるのかということも問題となっています。その他にも、「性差別」と「性暴力」の共通点についてや女性の社会進出や性暴力に関係する社会的地位が絡む問題、フェミニズムや男女平等と語るときに語られる「性暴力」の問題、女性の社会進出を妨げているモノ・コトの問題などが議論されました。

＜今後のアクション＞
今後のアクションとして、使用されるワードが原因でお金が集まりにくいという現状を変えるアクションを起こす必要性があることを議論されました。また、国・企業などの組織が行うべき対策として、企業や国、大学は学生がリスクを犯してまで行動していることの理解を促進することが挙げられました。今後のユースの取るべき行動としては、みなが当事者であると認識すること、そして、エンパワーメントを高めていくことが話されました。

分科会1-6　循環型社会～資源･環境･経済～

登壇者：NPO法人持続可能な社会をつくる元気ネット、国際環境NGO　グリーンピース・ジャパン、TB4S



＜背景＞
現在、社会は、環境に負荷をかけないために循環型の資源利用を確立することが求められています。そこで、普段何気なく捨てている「ゴミ」の中でも再資源化するという観点から、金属資源と化学燃料資源（プラスチック）に重点を置き、資源、経済、環境の観点から循環型社会を形成する方法を探っていく必要があります。当分科会では、再資源化の進まない現状の問題点を明示しつつ、参加者を交えて、日常生活で貢献できることを考えました。

＜現状抱える課題＞
プラスチック：毎年800万トン(毎分トラック一台分)のプラスチックが海洋に流出しています。海洋で砕かれたプラスチックはマイクロプラスチックになり、生態系そして人間の生活にも影響を及ぼしています。さらに、プラスチックの製造に石油を消費するため気候変動にも影響があります。
金属資源：スチール缶アルミ缶のリサイクル率は非常に高いものの、再資源として利用できる家電リサイクルの特にエアコンの回収率や使用が増えている小型家電の回収率が低いままなのが現状です。自動車はリサイクルの優等生ですが、そのようなことが社会にあまり認知されていません。

＜今後のアクション＞

今までのプラスチックを含む使い捨て文化を脱却したビジネスモデルへの移行や、マイボトルの普及などプラスチックに頼らないための取り組みが必要とされています。さらに消費活動などの「川下」での取り組みから、設計や生産活動などの「川上」への取り組みを促進していくことが重要です。
小型家電リサイクルの促進として2020年東京オリンピック・パラリンピックの都市鉱山からつくる「みんなのメダルプロジェクト」のような試みを継続・発展させていくことが望まれます。また、生産・消費・廃棄・再資源化という意識を消費者や市民に根付かせていく必要があります。
私たちが身近に行動変革できることとして、購買行動やシェアリングサービスを活用すること、さらなる廃棄物の再資源化などが議論されました。

分科会1-7 Leave No One Behind-Building Inclusive Society

登壇者：日本学生平和プラットフォーム、移住連、Stand with Syria Japan

＜背景＞
SDGsは「誰も取り残さない」世界を目指しています。しかし、SDGsの言葉だけが先行し、現実的に取り残されている人々に対して焦点は当てられているかどうかについて疑問が浮かびます。本分科会では、SDGs達成への動きが加速する中、そこから零れ落ちた課題や人々に目を向ける機会を提供しました。具体的には、先進国である日本の中で取り残されている人々や、世界でいまだ深刻な課題に着目しました。

＜現状抱える課題＞
日本：日本に在留する外国人は263万人であり、外国ルーツ、移住女性、移住労働者、高齢者など多様な人々がいます。日本の外国人受け入れ数は年々増えているものの、まだまだ他国と比べ少ないのが現状です。そのため、外国人受け入れの制度に関して、より多くの人に対して一人一人に見合った政府による包括的な政策が求められています。
シリア：化学兵器が使用された全29回のうち、シリア政府が23回を占めているなど、明らかに不平等な環境にさらされています。Stand with Syriaはその中でも特に抑圧された人々をターゲットにしています。
＜今後のアクション＞
専門性が深くなって、どんどん一般人にとって分かりづらい内容になっており、意識の高い人と興味のない人との格差がかなり深刻な課題になっています。そのため、興味のない人にも分かるように、分かりやすく社会課題について伝えていくこと、そして具体的に自分たちに何ができるのか・自分たちの行動がどのように繋がるかを伝えることで、政治などの参加までのハードルを下げていくことが重要となっています。

また、SDGsは目指すものとしてはいいですが、どう具体的に実現していくのか、SDGsを実現した時の社会へのレスポンシビリティを考えていくことも重要となっています。

分科会2-1　SDGsに向けてどう人々の行動を変える？

登壇者：Wake Up Japan 、ESDユース、SDGs for school、FTSN JAPAN、NPO法人 The Peace Front

〈背景〉
SDGsは、未来の社会のために達成が求められている目標ではありますが、その達成に危機感を持つ学生が少ないのも事実としてあります。しかし、それは人々の意識が問題なだけでなく、その根底に眠る原因、さらにはその環境にも問題はあるかもしれません。この分科会では、今の状況を鑑みて、どうすれば人々の意識や行動を変えていけるのか、何が原動力となりうるのかについて議論を交わしました。

〈現状抱える問題〉
日本の学校が閉鎖的なコミュニティになっているからこそ、その枠の中で止まってしまっている人が多いのはもったいないとの声がまず出ました。また、日本の学校だけにとどまらず、社会と常に接点を持ち、活動して行く環境が未だに不十分だと言えます。環境のみに留まらず、皆の意識も重要です。中でも、今の若者は自己肯定感が低いのかもしれません。私にもできるのかと怖気付いてしまう人もいるのも現実です。恵まれた日本のような環境では、消極的でも情報や機会は降ってくるからこそ、コミュニケーション能力や前に出て行く能力などは自らやって行く力で養う必要があるのでしょう。これは、人からの影響も大きいからこそ身近にロールモデルがいる環境が重要になってくるかもしれません。

〈今後のアクション〉
人は論理ではなく、感情で動く生き物だから熱量を持って、人の心をうごかせるような人間になることが今後求められるのではという意見が出ました。そして確かに人々が協力しあっ

て、大きなムーブメントを作るには、そのような人を巻き込んでいく力も必要な一方で相手への敬意を持って、尊重し合う事も大切とのことです。また、ムーブメントを作る上で、意欲ある人々が繋がれる体制を作って行くことが求められており、お互い駆けつけたりするコミュニティをもっと作っていきたいとの声も聞かれました。周りの人を巻き込み変えて行く、意思決定に関わって行く、それは小さな成功体験として積み重なっていくものなのかもしれません。最後に、私たちに求められているのは、こんな社会を作っていきたいという表明・発信であり、それとともに人々の幸せというと大げさかもしれませんが、誰かの笑顔に繋がってほしいという思いを育んでいけるようにしていくことなのかもしれないという意見が出ました。

分科会2-2　防災と若者- 持続可能で強靭なまちと社会

登壇者：自治体危機管理研究所、特定非営利活動法人CODE海外災害援助市民センター、DMAS日本災害医学会学生部会（日本DMAS)

〈背景〉
災害が起きた後の復旧の加速およびコミュニティの再生には、若者の取り組みが欠かせません。阪神淡路大震災の時より、災害の現場には常に若者がおり様々な形で役割を担ってきました。少しずつその形も洗練し、より円滑に協働できる形ができてきています。一方で避難所の場所や運営の問題、公的資金の問題など、改善すべきことはあります。このような背景の中、地元レベルで実践されている防災・減災の取り組みは、G20の各国の人々とも共有できるものです。どのような取り組みがあるのか、それはどのような協働の形態を取っているのか、どのようにすれば共有可能な形となるのか、セッションを通じて議論し考えました。

〈現在抱える課題〉
行政の理念は公平・平等であり、一人一人に対してのアシスタントや各地域への行き届いた復興作業徹底は行政に頼りきるだけでは不可能です。災害に遭った地域では自治体職員も被害者となり、その場合事前に自治体間で連携を取り合って、有事備えて周りの自治体に助けてもらえるようなバックアップ体制を構築する必要があります。災害が起きた地域では、災害に遭った人が受け身になってしまっているケースが多い傾向にあります。被災された方々がボランティアの人に頼りっきりになり、助けてもらうのが当たり前にならないように、ボ

ランティア側も、被災された方が普通の生活を送れるように支援する、という信念でボランティアをすべきです。岩手県田老町で津波対策の為に国が作った高い防潮堤が津波により破壊されました。仮設住宅に継続的に在住する期間が長すぎる問題もあります。また、ボランティアの場で、大人が若者というだけで利用してくるなどといった問題があります。

〈今後のアクション〉
被災者のPTSDを回復させる為に、普段通りの生活に早く戻れるアシストが最重要です。災害により、長期的な心のケアが必要なのか、それとも二次災害を防ぐ早急な対応を必要としているのか、災害によってニーズが変わるため、多様な準備をしておく必要があります。自衛隊や自治体と日頃からコミュニケーションを取り、地域連携を促進することも大切です。

分科会2-3 「誰一人取り残さない」社会に向けたアクション

登壇者：はんしんワーカーズコープ、TRY-外国人労働者・難民と共に歩む会、メインストリーム協会

＜背景＞
　SDGsがますます盛り上がりを見せる一方で、現代社会は人類史上最も格差が開いているとも揶揄されます。この格差社会のあらゆる場面には疎外があり、その疎外を解消しようとする取り組みが現場レベルにて実施されています。果たして、社会にはどのような疎外が蔓延し、克服するために各アクターはどのような取り組みを実践しているのでしょうか。
　本セッションでは、様々な背景をもつアクターを呼び、具体的な疎外の現状、取り組み、さらには政策的背景を議論しました。「誰も取り残さない-Leave No One Behind」の意味を改めて問い直し、現代社会に存在する課題に目を当て、社会の改善に向けた声を集める機会となりました。

＜現状抱える課題＞
引きこもりや障害者、外国人労働者など、社会から疎外され自立することが難しいケースが現在の社会には存在します。そのような人たちを取り巻く困難の根幹には、自己の権利擁護が不十分に出来ないことがあります。障害者が自ら介助制度に対して声を上げるにはどうしたらいいか。収容所の外国人労働者は厳しい状況を誰に相談すればよいのか。このように当

事者が声を上げ、それを周囲が受け止めるといった構造が確立されていないというのが現状です。

＜今後のアクション＞
権利擁護のために、当事者自らがコミュニティの中で事業創出や政策提言に関わる機会を持つことは重要です。当セッションで具体的に扱った活動のように、障害者や引きこもりの方が主体的に活動の幅を広げ、「取り残されていた」状況から社会に溶け込める事例もあり、こうした取り組みの拡充が期待されます。その一方で、外国人労働者に代表されるように未だに「取り残されている」人が多く存在します。社会との接点が乏しい人へ耳を傾け、声を拡散するといった取り組みが改善のきっかけとして機能し、当事者が支援者と共に意見を反映させられる動きが起こすことが大切です。

分科会2-4 若者の政治・意思決定参加

登壇者：日本若者協議会、生物多様性若者ネットワーク、名古屋わかもの会議実行委員会、Mielka

＜背景＞
　現在行われている意思決定の場に若者はいるでしょうか。また、そのような場を遠い存在であると多くの若者は考えているのではないのではないでしょうか。国内における意思決定のプロセスや自治体における意思決定に若者はあくまで実施者としか見られず、効果的に参画できているとは言えません。若者全体としてどのようにすれば若者の声を反映していけるのかに着目します。

＜課題＞
　現在の若者の多くは自ら政治を学ぶことは少なく、また関心があったとしても実際に投票に行くなどの行動に繋がっていないのが現状です。また、LGBTQや同性婚を認める社会に若者は賛成していても、社会制度に取り入れられないように、若者の意見は反映されていません。現状改善のためには、公平で中立的な情報が有権者の元に届くようにし、若者が政治を近くに感じられるようにしなければなりません。

＜今後のアクション＞
　まず、政治をより身近に感じられるようにする必要があります。次に、政治に関して友人と話すことで意識が高いというレッテルを貼られてしまう風潮を変える必要があります。議員と学生が実際に会い、対話する場を設けることや、友人と気軽に話せる環境づくり、情報をわかりやすく有権者に伝える仕組みの確立を進めていくべきです。さらに、最近では、女性雑誌の中に政治

に関する内容が掲載されるなどの活動がなされているように、日本においてタブーとされてきたことや風潮を変えて行くことが求められます。

分科会2-5　自治体と若者の協働

登壇者：神戸市、徳島大学（こまつしまリビングラボ）、㈱神戸デジタルラボ、NPO法人しゃらく

＜背景＞
SDGsの達成に向け、持続可能な社会にしていくためのパートナシップ創造に向けては、あらゆる自治体が、そこに住む人々、特に若者と協働していく環境を作らなければなりません。自治体には、人々の生活を良くするためのリソースが多く存在しています。そして、多くの自治体が若者との協働を進め、住環境改善を試みています。しかし、一方で、どのような形で協働していくのがよいのか、どのような形が両者にとって最善なのか、多くが手探り状態で留まっている状況にあります。

＜現状抱える課題＞
自治体において、現状についてヒヤリングしていくと多くの人が課題や問題を感じていますが、その課題・問題の捉え方は若い世代と高齢者との間で異なっているという現状が見受けられます。課題解決のためにアイデアを出す若者に対して、高齢者は諦めを感じており、今まで様々な取り組みを行っても特に何も変わらない現状を見てきたことから、そのように捉えてしまっているのが現状です。

＜今後のアクション＞
若者から高齢者まで、自治体全体が一丸となって共同していくことが求められています。また、大切なことは自治体が残り続けることではなく、その時々に社会を背負っている人たちがしっかりとアクションを取れるようにすることであり、そのための種を植えるべく様々なプロジェクトを自治体が一体となり進めていく必要があります。

分科会2-6 仕事の未来、未来の仕事

登壇者：青年会議所、国際労働機関、伝統大工

＜背景＞
仕事のあり方は大きな変化の真っ只中にあります。我々を取り巻く環境、デジタライゼーションや技術の発展、少子高齢化により、雇用の消失と出現が発生しています。各種プラットフォームの上で各々が経済活動を行ったりと、仕事のあり方および各々に求められるスキルセットが変わりつつあります。
デジタライゼーションを通して我々の仕事が自動化され、利便性が格段に向上した一方、自動化により失われつつあるモノ・コトや仕事もあります。気候変動が様々なモノ・コトの製造や流通に大きな影響を与えている中、新しい市場が開かれていることもあります。また、少子高齢化により人手不足が多発している一方、その対策として、仕事の生産性を向上させるための取り組みが行われています。今後もたらすであろうメリット・デメリットを正しく理解し、近未来の仕事のあり方を考えていきました。
着目点（ディーセント・ワーク、人間の感性）

＜現状抱える課題＞
ディーセント・ワーク（働きがいのある人間らしい仕事）は大きく4本の柱：労働諸権利、仕事する機会、社会的対話、社会的保障でできていますが、多様な社会課題を背景に、それが現在崩れかけています。そのため、Future of Workについて世界各国の政府、労働者、企業経営者の三者同士が議論し作り上げていき、そこから逆算した仕事を作っていく必要性が高まっています。また、人工知能の台頭により、失われる仕事・残る仕事を見極めていく必要があります。
どんな所でも働ける環境を推進する取り組みとして、テレワークが挙げられます。この取り組みは、IT系など導入しやすい分野では進んでいますが、サービス業、生産業などの分野では中々導入できていないという現状があります。その背景には様々な要因がありますが、根本的な課題として経営者と労働者との信頼関係が取れていないということが挙げられていました。

＜今後のアクション＞
社会全体として、富は増えているにも関わらず格差が広がり、労働環境が悪化している要因として、富の再分配ができていないことが挙げられます。そのため、ディーセント・ワークを進める上で、インパクト投資（ソーシャルインパクトかつ経済的効果もあるものに対する投資）や社会連帯経済（制度から抜け落ちてしまった人たちにも恩恵が受けられるようなボトムアップ型の仕組み、インパクト投資に保管する形で定義しています。）あらゆる経済パラダイムと違う構築が重要となってきています。そのため、一つのあげられたソリューションは選挙にいく事でした。

閉会式（各団体の報告、ユースサミット宣言文、閉会式、総会）

閉会式では国連環境計画UNEPの大阪国際環境技術センターより、藤山氏のビデオレターメッセージをいただきました。藤山氏は、国連が強調するユースの役割とSDGsに対する参画の期待を述べられました。また、国連のシステムと政策作り、国際機関や政策へのユースの積極的な参加を促し、自分から変わっていく、社会に向けて発信し続けることの重要性をお話ししていただきました。ビデオの最後には、「未来に向けて一緒に社会を変えていきましょう。」との力強いお言葉もいただくことができました。その後、G20YSユース宣言について簡単な説明をJYPSの佐井が行いました。ここでは、宣言案の重要な内容を抜粋して発表し、詳細は今後公開されるオンライン上で確認してもらうよう案内しました。
最後に、JYPSの理事団体であるClimate Youth Japan (CYJ)の今井絵理菜氏より閉会宣言がありました。今井氏は、今回のG20ユースサミットの目的をもう一度全体で確認した上で、今回のユースサミットの成果を語っていただいきました。その上で、今後も若者の参画をより一層進めていく上での課題を共有しました。その中には、若者のプラットフォームとなるJYPSがより、プラットフォームとしての機能を果たしていく必要があることを確認しました。
閉会の挨拶の後は、全員で写真撮影を行い、ユースサミットを終了しました。

G20YSユース宣言

2019年6月28~29日にG20首脳会議が初めて日本で開催されるに伴い、開催国である日本に住む若者を中心にユースサミットを開催しました。今回のG20は私たちの世界を変革

する持続可能な開発のためのアジェンダ2030（以下アジェンダ2030）、気候変動に関するパリ協定（以下パリ協定）、防災のための仙台枠組み(以下仙台枠組み)、開発資金のためのアディスアベバ行動計画（以下アディスアベバ行動計画）採択後初の開催にあたり、日本政府、G20加盟国政府の積極的なコミットメントが期待されています。2019年6月22日、23日に神戸市外国語大学で開催されたG20ユースサミットは、若者の声を集約し、調整し、訴える場を実現しました。その方法は、民主的なコンセンサスに基づく、オープンな意見の集約による政策提言を基軸にしました。

G20YSユース宣言の全文はこちら（英語要約、日本語）

大阪市民サミット

G20に伴ったサミット開催は私たちユースだけでなく、日本の市民社会も6月25・26日の2日間にわたり「G20大阪市民サミット」を開催しました。世界の市民社会の声を集約・提言するだけでなく、日本の地域での声の集約や問題の提示、そして公正で説明責任を発揮できる持続的な場作りを目的として行われた大阪市民サミット。日本各地から多種多様なビジネスセクター、NPOやNGO団体が集い、日本の社会問題や置かれている現状について議論しました。教育、セクシュアリティー、健康、政策立案、民主主義の精度、地域性などさまざまな分野や課題を絡めた分科会が行われ、最終的に全体提言と分科会別提言書というかたちで成果物が出されました。私たちJYPSは、G20大阪市民サミット中にJYPS事務局員である新武志が今回のG20ユースサミットについて報告をする機会がありました。報告の場では、ユースサミットの目的とテーマ、大まかな構成、実際の成果、感想、そしてそれをふまえた今後の課題やアクションについて市民社会の方々へ共有することができました。

成果

本ユースサミットは、①ユース団体またはユース個人同士でのパートナーシップの促進②ユースの意見を集約し、政策提言の土台作りを行う、の２点を主な目的に据えて開催しました。

実際の成果として、①のパートナーシップ促進については、34団体のポスター・ワークショップ出展や50人以上の分科会登壇者、そして、のべ200人以上の参加者という数字に表

されているように、多様なバックグランドを持つ人々が数多く集まったことにより、多くの「つながり」を生み出す機会にすることができました。開催直後から、ユースサミットを通して得られたつながりを活かした取り組みが実現している連絡もありました。今後は、継続的につながりを活かし、より多くのインパクトある協働を生み出していきたいと考えています。

また、②については、ユースサミット主催のJYPSが主導で「G20YSユース宣言」を作成しました。こちらは、現在のユースを取り巻く様々な課題に対してユース自身の意見を集め、社会の意思決定プロセスにその意見を届けるための文書です。宣言文の作成過程は、まずJYPS事務局で宣言案を作成し、ユースサミット開催前から分科会登壇者や当日の参加者から幅広く宣言案に対して意見を吸い上げ、開催後にもう一度JYPS事務局で修正するというものでした。実際に、多くの意見が寄せられ、幅広い観点をカバーした宣言文を完成することができました、この宣言文を持って、今後の国際会議等で、ユースの意見を訴えていく予定です。

運営

主催：持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム（Japan Youth Platform for Sustainability）

持続可能な社会に向けたジャパンユースプラットフォーム(英語名: Japan Youth Platform for Sustainability (以下: JYPS)) とは、2015年に国連で採択された「ポスト2015開発アジェンダ」やその他国連で行われているさまざまな枠組みを作るための議論に向けて日本の若者の声を集約し、政策として日本政府や国連機関、そのほかの市民社会にその声を届けていくための「場」です。代表はなく、選出される幹事及び事務局のもとで若者の「アドボカシー（政策提言）」として、キャンペーン、イベント、記事掲載その他を通じて、さまざまなバックグラウンドをもつ若者の声を実現していくためにあります。30歳以下の個人または、そのような個人で構成される団体、もしくは30歳以下の若者と働く団体であれば、だれでも参加することが可能です。

実際にJYPSはこれまで国連および日本国内における持続可能な開発やそれに関する会議へと参画してきました。国際面ではG7伊勢志摩サミット、HLPF、APEC、TICAD等、国内面ではODA政策協議会、日本政府によるSDGs国内実施指針・骨子の制定プロセス等への参画を行っています。そして、今回G20ユースサミットを神戸市外国語大学にて初めて開催となります。

Japan Youth Platform for Sustainability 運営メンバー名簿

名前	役職
淵上　貴史	事務局長／実行委員長
岡部　エミリー　直美	事務局長
佐井　以諾	事務局員／運営統括／政策部
山口　和美	事務局員／TICAD実行委員長／参画部
原田　直美	事務局員／アドミン部スタッフ
加戸　菜々恵	事務局員／ニューヨーク支部統括

新　武志	事務局員／ニューヨーク支部パブリシティ
奥村　直美	事務局員／ニューヨーク支部パブリシティ
大久保　勝仁	前理事／参画部統括
唐木　まりも	前理事
Peter Abraham Fukuda Loewi	事務局員／政策部スタッフ
辻野　瑞樹	事務局員／政策部スタッフ
小池　宏隆	顧問

G20実行委員会

G20実行委員運営メンバー名簿

名前	役職
アウトリーチ	
長村　勇輝	コーディネーター
布施　香穂里	スタッフ
桐　葉恵	スタッフ
笠井　俊佑	スタッフ
舟橋　美希	スタッフ
河合　将貴	スタッフ
小林　万莉	スタッフ
堀　克紀	スタッフ
大貫　萌子	スタッフ
ロジスティックス	
東上　菜々子	コーディネーター
新荘　直明	スタッフ
岡田　のどか	スタッフ
岡田　和也	スタッフ
森田　美咲	スタッフ
宮下　清美	スタッフ

神戸市外国語大学G20実行委員

神戸市外国語大学での開催が決定した後、開催の架け橋となった永尾氏が継続的にJYPSと開催校側の連絡を通じて、企画準備・運営に携わりました。準備段階の時点で、神戸市外国語大学の学生の中で、運営ボランティアチームを組織することを永尾氏に提案しました。その結果、合計27名の学生が有志で運営ボランティアとしてG20ユースサミットに関わっていただきました。神戸市外国語大学の運営ボランティアチームの役割は、当日の受付や案内の担当、広報担当、G20ユースサミット開催日と同日に同大学で開催されていた模擬国連大会（JUEMUN）との連携企画の担当の3つでした。準備期間におきましては、会場内においての展示団体の出展場所の振り分け作業、通訳の準備、本イベントのフライヤー・パンフレットを実行委員会と合同作成、SNSを使っての広報、連携企画におけるG20ユースサミットの広報などをしてくださりました。当日は、当日の設備設営、受付や案内、イベント内容をSNSで拡散してくださりました。準備期間・イベント当日が終了するまで、多方面で多大な協力をしてくださりました。

広報活動報告

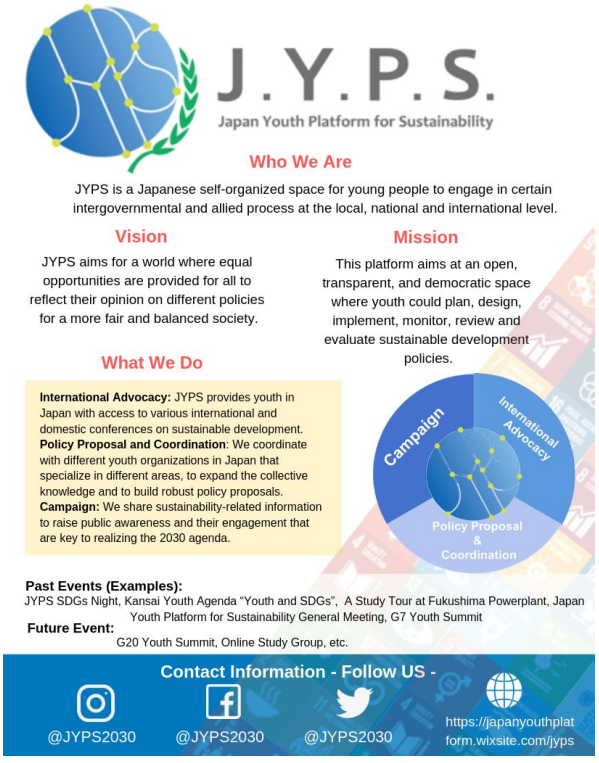
広報戦略概要

広報戦略として、
　SDGsに関心を持つ多くの若者の目に届くような情報の拡大に務めること
- 多様な活動に取り組む若者が集うよう、様々な団体や媒体とのパイプを繋ぐこと
- JYPSの活動に興味を持ってもらえるような発信をすること

の3点を目的に活動しました。
Facebook、Twitter、InstagramといったSNSでの投稿に加え、専用のランディングページの作成にも取り組みました。また京阪神の大学や高校へのフライヤー配布も実行しました。

団体紹介フライヤー

JYPS団体紹介のフライヤーは、今年度4月に行われたECOSOCユースフォーラムで使用されたものと同じものを使用しました。当日は神戸市外国語大学の～～で、配布しました。



SNSやホームページを通じた発信

SNSやホームページを通じた発信として、ブログ（HP）、Twitter、Facebook、Instagramで発信を行いました。ブログに投稿した記事を各SNSでシェアするなどの連携も行いました。また、#～～～、#～～ などのハッシュタグを活用し、連携団体との繋がりも意識して情報の発信を行いました。

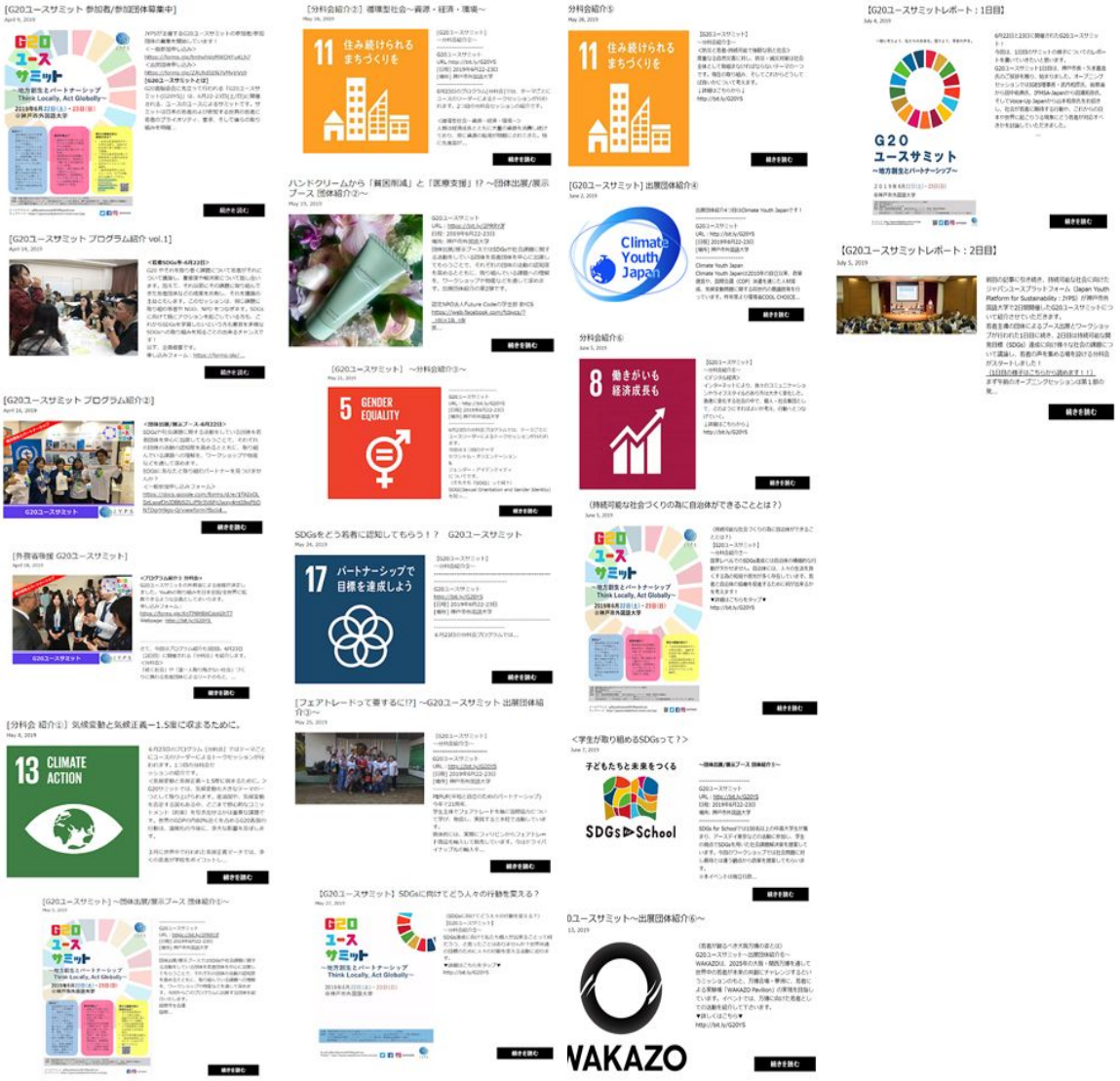
ブログの運用

G20ユースサミットの2ヶ月前である4月9日から、ユースサミットに関する基本的な背景となる知識、プログラム紹介、出店団体紹介、分科会紹介等をブログを通して報告・発信しました。ブログは日本人を対象に日本語で記しました。また、マーケティングチームで執筆し、写真やSDGsのアイコンを取り入れながらブログを投稿しました。また、機械的にブログを書くのではなく、読み手の関心を引けるよう投稿の文章や文量を考えるとともに、リンクを張りリンク先に詳しい内容を記載し多くの人に関心を持ってもらえるように心がけました。

Website：http://japanyouthplatform.wix.com/jyps

ブログ記事一覧

#	タイトル
1	【G20ユースサミット　参加者/参加団体募集中】
2	【G20ユースサミット　プログラム紹介　Vol.1】 若者SDGs市
3	【G20ユースサミット　プログラム紹介　Vol.2】団体出展/展示ブース
4	【G20ユースサミット　プログラム紹介　Vol.3】分科会
5	【分科会紹介①】気候変動と気候正義ー1.5度に収まるために。
6	【出展団体/展示ブース　団体紹介①】国際学生会議
7	【分科会紹介②】循環型社会～資源・経済・環境～
8	【出展団体/展示ブース　団体紹介②】ハンドクリームから「貧困削減」と「医療支援」!?
9	【分科会紹介③】セクシュアル・オリエンテーション＆ジェンダー・アイデンティティ
10	【分科会紹介④】高校・大学におけるSDGs推進
11	【出展団体/展示ブース　団体紹介③】PEPUP(平和と自立のためのパートナーシップ)
12	【分科会紹介⑤】SDGsに向けてどう人々との行動を変える？
13	【分科会紹介⑥】防災と若者～持続可能で強靭な街と社会～
14	【出展団体/展示ブース　団体紹介④】Climate Youth Japan
15	【分科会紹介⑦】デジタル経済
16	【分科会紹介⑧】持続可能な社会づくりの為に自治体ができることは？
17	【出展団体/展示ブース　団体紹介⑤】SDGs for School
18	【出展団体/展示ブース　団体紹介⑥】WAKAZO
19	【G20ユースサミットレポート：1日目 】
20	【G20ユースサミットレポート：2日目 】



Twitterの運用

Twitter：http://bit.ly/2VCC2Me

　Twiterでは、G20ユースサミットの一般参加者募集、プログラム紹介、分科会紹介に関する投稿を4月9日より開始し、当日までに25件の投稿を行いました。投稿できる文字数が限られているため、少ない文字で目を引き、ランディングページへリンクを押してもらえるように工夫をしました。具体的には、初期の投稿では投稿の初めに概要、最後にリンクを貼るという内容でしたが、閲覧者の反応が薄かったため、投稿の初めにキャッチコピーとリンクを貼るように改善しました。しかし、インプレッション数（閲覧数）はかなりあるものの、それに対してエンゲージメント数やLPのリンククリック数は伸びませんでした。Twitterでは特に閲覧数は多いものの投稿を流されてしまう傾向があるため、いかに投稿に対してアクションを起こしてもらえるかをさらに工夫しなければならないと考えます。

投稿日	内容	インプレッション数	エンゲージメント数	LPリンククリック数	いいね数	リツイート数
4月9日	参加者募集開始	1630	30	9	4	3
4月14日	プログラム紹介	322	11	1	2	0
4月16日	プログラム紹介	349	1	0	1	0
4月16日	プログラム紹介	851	25	1	3	1
4月18日	プログラム紹介	1610	65	12	5	1
4月24日	参加者募集	1346	17	6	3	3
4月24日	参加者募集	3258	58	13	5	5
4月27日	プログラム紹介	1270	17	6	2	1
4月28日	LP紹介、プログラム紹介	1176	8	2	2	1
5月8日	分科会紹介	867	13	3	4	1
5月9日	分科会紹介	1094	22	6	3	2
5月18日	分科会紹介	901	12	0	3	1
5月19日	分科会紹介	1106	21	3	2	1
5月21日	分科会紹介	1021	35	5	4	1
5月24日	分科会紹介	850	9	1	1	1
5月25日	分科会紹介	2008	38	4	7	1
5月26日	分科会紹介	919	24	2	4	2
5月27日	分科会紹介	1457	14	1	6	1
5月28日	分科会紹介	734	17	5	4	0
6月3日	分科会紹介	596	12	1	2	0
6月4日	分科会紹介	610	7	2	2	0
6月5日	分科会紹介	844	14	2	1	1
6月7日	分科会紹介	1009	25	0	4	1
6月12日	分科会紹介	528	15	4	2	1
6月13日	分科会紹介	1509	38	5	1	3

(2019年7月17日現在)

Facebookの運用

Facebook：http://bit.ly/2W50Lgf

Facebookでは、G20ユースサミット一般参加者募集開始から、プログラム紹介、出展団体や分科会紹介を通して開催レポートの投稿を行いました。

投稿数が多いためリーチ数の幅は大きいですが、平均的には約300人、最大のリーチ数はJYPSアカウントの固定ポストになっていた記事で4500人を記録しました。分科会紹介や出展団体紹介の記事は、硬い表現になってしまっている部分も多く、スタイルもマンネリ化していたためあまりパッとした印象になっていなかったと思われます。また分科会登壇者や出展団体の発表内容が具体的に決まる、もしくは教えてもらう時期が遅かったのもあり、記事自体が抽象的すぎてシェアが伸びなかったのもあると思います。基本的に、シェア数やいいね数の多いものがリーチ数が多い傾向にあり、それぞれ相関関係にあると考えられます。
フェイスブック上でイベントへ興味があると示した人数は741人であり、当日イベントに来場された人数は127人でした。
興味を示してくれていた人への直接的なアプローチ、また他団体に投稿をもっとシェアしてもらうことでリーチ数を伸ばすことができたのではとの反省が残ります。投稿する際分科会で話し合われるテーマに関したSDGsのゴールの画像を使ったり、イベントのポスターを使用すると、使用していない投稿に比べてリーチ数が伸びています。

過去28日間で8134人のリーチ数を記録し、187人がイベントへ参加しました。エンゲージメントは2000を、リンクのクリック数は220を記録しました。

投稿日	題名	リーチ数	エンゲージメント数	いいね数	シェア数
3/5/19	【若者としての声を反映するユースサミット参加団体募集（6月22・23日開催】	603	60	16	4
4/9/19	[G20ユースサミット一般参加申し込み開始]	384	76	11	3
4/14/19	[6/22-23開催＠神戸　G20ユースサミット プログラム紹介]	213	43	10	3

4/16/19	[G20ユースサミット] プログラム紹介②	243	28	6	1
4/24/19	[私たち若者の声を、私たちで届けませんか？] G20ユースサミット（6月22-23日@神戸）参加者募集	4500	628	43	16
4/27/19	[外務省後援　G20ユースサミット]〈プログラム紹介④ ハイレベル会合一政策変革とポスト2020に向けて〉	402	28	5	-
5/8/19	<G20ユースサミット>　～ 分科会セッション紹介①～	210	32	14	3
5/9/19	[G20ユースサミット] ～団体出展/展示ブース 団体紹介①～	368	43	8	2
5/18/19	分科会紹介2 ＜循環型社会～資源・経済・環境～＞の紹介です！	153	12	9	-
5/20/19	[G20ユースサミット] 出展団体 BYCSさんの紹介です！	193	14	8	3
5/21/19	［G20ユースサミット］ ～分科会紹介③～			5	-
5/23/19	【G20 ユースサミット】 ～分科会紹介③～ ＜「誰一人取り残さない世界って？＞	180	9	6	2
5/23/19	【G20 ユースサミット】 ～分科会紹介③～ ＜高校・大学におけるSDGs推進＞をテーマにディスカションします！	203	19	6	2
5/25/19	フェアトレードって要するに!?] ～G20ユースサミット 出展団体紹介③～	177	4	1	1
5/26/19	[SDGsの達成に向けて若者が出来ることは何だろう？]	2200	363	19	9
5/27/19	〈SDGsに向けてどう人々の行動を変える？〉 【G20ユースサミット】 ～分科会紹介⑤～			11	1
5/27/19	【G20ユースサミット】 ～分科会紹介⑤～ ＜防災と若者-持続可能で強靭な街と社会＞	270	16	4	-

6/3/19	＜「気候変動」を伝えるということ＞ ～G20ユースサミット 出展団体紹介④～	290	30	4	3
6/4/19	【G20ユースサミット】 ～分科会紹介⑥～ ＜デジタル経済＞			5	-
6/5/19	〈持続可能な社会づくりの為に自治体ができることとは？〉 【G20ユースサミット】 ～分科会紹介⑦～			7	1
6/7/19	[G20ユースサミット] 参加団体 SDGs for Schoolさんの紹介	402	28	4	-
6/12/19	〈若者が創るべき大阪万博の姿とは〉 G20ユースサミット～出展団体紹介⑥～			5	1
6/18/19	[G20ユースサミットの申し込みについて]			9	1
6/25/19	【G20ユースサミット開催報告】	2500	703	45	8

※リーチはユニークユーザーに対するインプレッション（投稿の表示）。
※エンゲージメントはポストのクリック回数にポストに対する行動（リアクション、コメント、シェア）を足したもの。

Instagramの運用

Instagram：http://bit.ly/2WXFmCS

Instagramでは、G20ユースサミットの一般参加者募集、プログラム紹介、分科会紹介に関する投稿を4月9日より開始し、当日までに23件の投稿を行いました。Instagramでは投稿時の画像が閲覧者のファーストコンタクトになるため、文章まで読み込んでもらうためには、このファーストコンタクトを工夫する必要があったと考えます。途中SDGsの各ゴールの画像を投稿し、閲覧者にとって分かりやすい表式を使用しましたが、リーチ数にあまり変化はありませんでした。しかし、各投稿において少数ながらも新規フォロワーが増えたため、新規閲覧者の獲得には繋がったと考えます。

投稿日	内容	リーチ数	インプレッション	新規フォロー	いいね	保存数
2019/04/09	一般参加者募集開始	299	569	1	30	5

2019/04/14	１日目プログラム紹介	329	555	1	33	2
2019/04/16	１日目プログラム紹介	263	492	1	26	0
2019/04/18	分科会紹介	333	540	0	35	1
2019/04/24	参加者募集	473	803	3	44	3
2019/04/27	ハイレベル会合　紹介	357	675	0	33	1
2019/05/08	分科会　紹介	284	570	0	33	1
2019/05/09	団体紹介①	253	415	0	21	1
2019/05/18	分科会　紹介	295	572	0	17	2
2019/05/19	団体紹介②	285	530	0	22	1
2019/05/21	分科会　紹介	199	472	3	27	0
2019/05/24	分科会紹介	273	538	1	33	2
2019/05/25	出展団体紹介	229	485	0	23	0
2019/05/26	参加者募集	239	440	2	17	1
2019/05/27	分科会　紹介	252	391	0	24	0
2019/05/28	分科会　紹介	193	435	0	20	0
2019/06/03	出展団体紹介	232	460	1	19	0
2019/06/05	分科会　紹介	183	373	0	18	0
2019/06/07	分科会　紹介	265	442	1	27	1
2019/06/12	出展団体紹介	227	531	0	14	0
2019/06/13	出展団体紹介	206	351	0	11	0
2019/06/25	事後報告	300	636	0	47	2
2019/06/28	事後報告	291	630	0	28	1

広報戦略 課題

広報戦略における主な課題に以下の2点が挙げられます。

①開催地近辺への直接的なアプローチ

②オンライン広報の限定的なリーチ

①に関しては、海外のメンバーも含めた全国に散らばる運営チーム下で開催地である関西の人々に直接広報することには困難が伴いました。関西在住の実行委員が直接近隣大学を訪問して広報依頼をかけるなど試みましたが、アプローチ数は限定的であり、関西の実行委員に負荷が偏ることになりました。改善策としては、開催地以外に住む実行委員も、開催地近辺の大学に対してオンラインベースでメールでの広報依頼を行うなど作業に加担することが望ましいと言えます。

②に関しては、FacebookやTwitterではJYPSをあらかじめフォローしていた人にしか広報が伝わらないため、リーチ数はさほど伸びなかったことが課題でした。改善策として、渉外チームと連携して他団体を通じた広報を網羅的に行う、JYPSとしてユースが集う広報網をリストアップしておくなどが挙げられます。

助成

地球環境基金

当イベントは地球環境基金の助成により運営されました。

後援

日本国外務省 / Ministry of Foreign Affairs, Japan

神戸市外国語大学

G20大阪市民サミット実行委員会

G20市民社会ネットワーク/ Japan Civil Society Platform for G20 Summit

KANSAI-SDGs 市民アジェンダ /KANSAI-SDGs Civil Agenda

(特活)関西NGO協議会 / Kansai NGO Council

日本労働者協同組合(ワーカーズコプ)連合会 / Japan Workers' Co-operative Union

公益財団法人 地球環境戦略研究機関 /Institute for Global Environmental Strategies

地球環境パートナーシッププラザ(GEOC) / Global Environmental Outreach Centre